

水泳部部長の受難

スタンプ



1 設定

大学の強豪水泳部に所属する近藤ハジメはエースで部長、かつ人望もあり部員からも慕われている。短髪のりりしい顔立ちで女子にももてる今時男子。

しかし、水泳部の監督の佐々木はパワハラ気味でたびたびハジメと口論になっていた。パワハラというのも普通ではなく、ペナルティと称し、一部の部員を全裸で泳がせたり、便器に顔をつっこんだり、全身に落書きをしたうえで柱にくくりつけ、さらしものにしたりとやりたい放題だった。

正義感の強い近藤はこれまで幾度となく、抗議し、佐々木に屈しない姿勢をつらぬいてきたのだ。

その姿勢に賛同する部員もいれば、何かと完璧でいじめやパシリを許さない正義感ぶったハジメに反発する者もいた。

その一人が後輩の田中正樹だ。田中は監督と馬が合い、後輩をパシリにしたり、いびったりしている部員だ。そのことで幾度となくハジメから注意されており、そのことを根に持っていた。

この物語はハジメが「これまでのことを謝りたい、、、」と田中からとあるバーに誘われたことから始まる、、、。

2 はじまり

田中が反省するなんてどういう風の吹き回しだ、、、そう思いながらも約束のバーで田中を待つハジメ。

「サービスです。」とマスターに勧められたお茶を飲んでいる。

それにしてもこのバーなんか普通じゃないような、、、

どことなく怪しい、いやらしい雰囲気をただよわせているバーだが、マスターの笑顔がそれを払拭している。

そんなことを考えているうちにいつの間にか眠ってしまったハジメ。。。。

うう、、、俺寝てたのか、、、

目を覚ますと、全裸にされ、SMの器具のようなもので立ったまま大の字に固定されていることに気づく。

な、、、なんだよ、、、これ、、、どうなってるんだ、、、！？

あわてるハジメにマスターが笑いながら近づいてくる。

「よく眠っていたね。」

そういいながら、マスターはハジメの水泳で鍛えられた尻をもみだす。

俺に触るな！こんなことして許されると思っているのか！

ハジメは怒りに震えながらさけぶ。

「許されるだろうね、、、むしろ君にとってはよかったんじゃないかな、、、くくく」

先程の笑みとは違う、不気味な笑いにぞっとするハジメ。

マスターは尻をもんでいた手に何かを塗り、そのままハジメのアナルに侵入しだす。

じゅぽじゅぽ・・ぬぷぬぷ・・

いやらしい音が静かな部屋に響いている。

く、、、やめろ、、、変態、、、こんなことばれたら、、、お前捕まるぞ、、、
「ばれたら、、、捕まるだろうね、、、まあそうはならないから安心しなよ、、、」

ニコッと笑うマスター。

じゅぽぬぽじゅぽぬぽぽ・・じゅぽじゅぽぬぽぬぷ、、

指でアナルを開発され、苦痛でしかなかったが、何故か徐々に体がほてり、、、快楽に変わっていく。

くうう、、ううう、、いい、、やめろ、、いい、、、あ、あ、、あ、あ、、あ、、そこは、、、あ、あ。

しまいにはギンギンに勃起させてしまうハジメ。顔を真っ赤にしながら勃起ちんぽをびくつかせ、まるで喜んでいると主張しているようだ。

「うれしそうだね、、、近藤はじめ君。」

なんで、、俺の名前を、、、何が目的だ、、、。

「さあ、、なんだろうね」

そういいながら指を2本、3本と増やし、開発を続けるマスター。

しばらくして、開発したアナルにバイブを挿入するとマスターは何事もなかったように、部屋を出て行ってしまう。

ぶううんぶううんぶううん、、、静かな部屋にバイブの音が響く。

くうう、、なんでこんなことに、、、くそ、、、ああ、、ここはバーと同じ建物なのか、、、田中が来れば逃げられるかもしれない、、、。

くう、、あ、あ、、、あ、あ、あ、バイブが、、、ああ、、ああ、なんで、、、こんなに気持ちいいんだ、、、。

ちんぽをびくつかせ、我慢汁をたらしながら、必死に耐えるが、喘ぎ声はとまらなくなっていく。

1時間後にマスターが戻ってくると、ハジメはトロンとした表情に涙をうかべながらあえいでいる。

あひいん、、ああ、あ、あ、あ、いひん、、ああ、あ、あん、、あ、あ、あ、、あいいいん、、、。

床はハジメの我慢汁やよだれ、涙でびしょびしょになっている。
それを見てにやけるマスター。

「ずいぶん気持ちよそさそうだったね。」

そういうと密かに撮影していたハジメの様子を再生してハジメに見せる。

「こんなのが出回ったら、ハジメ君だけでなく、水泳部も有名になるだろうね、悪い意味で。」

その言葉にぞっとしながら、自分の立場を理解させられていく。

「さあ、今日は記念日だ。処女喪失のね。」

そう言うバイブを引き抜き、一気にギンギンに勃起した一物をハジメの中に挿入するマスター。

じゅぽぬぽじゅぽぬぽぽ・・・じゅぽじゅぽぬぽぬぷ・・・